

エミール・ゾラと『死せる女の願い』

田中 琢三

はじめに

エミール・ゾラの長編小説第2作『死せる女の願い』(*Le Vœu d'une morte*)は、1866年9月11日から26日まで日刊紙『レヴェヌマン』(*L'Événement*)に連載され、同年11月に、別の4つの短編とともに、アシル・フォール社から単行本として出版された¹。ゾラ最初の自然主義小説『テレーズ・ラカン』(*Thérèse Raquin*)が刊行される1年前のことである。ゾラの友人ポール・アレクシは、『死せる女の願い』において、ゾラは「芸術的な志向を実現する小説ではなく、もっぱら新聞向けの、予約購読者を楽しませることを目的とする作品を書こうとした²と証言している。実際、この小説は、当時の「ロマン＝フィユトン」(新聞連載小説)がそうであるように³、大衆受けを狙ったメロドラマ的な物語であるが、不評のために第1部が終わった時点で連載が打ち切れ、未完のまま終了する。駆け出しの作家であったゾラが、おそらく生活のために、娯楽作品を書こうと試みて失敗したのである。

このような経緯もあって、『死せる女の願い』は、一般に芸術的価値が低い作品と見なされており、これまで本格的な研究の対象になることがあまり多くなかった⁴。しかし、この小説は、「ロマン＝フィユトン」の紋切型だけでは

¹ 初版から23年後の1889年10月に、シャルパンティエ社から第2版が刊行されるが、その際、ゾラは表現のレベルで大幅な修正を加えた。ストーリーに変化はないが、メロドラマ的な大げさで冗長な言葉遣いを削除あるいは訂正している。本稿では、現在刊行中のヌーヴォー・モンド版の全集に収められた1866年のヴァージョン(*Zola, Le Vœu d'une morte, in Œuvres complètes, t. II, Nouveau Monde, 2002, pp. 11-111*)をテキストとして使用する。以後、このテキストから引用する場合、引用文後の括弧内にページ数を記す。

² Paul Alexis, *Zola. Notes d'un ami*, Maisonneuve et Larose, 2001 (1^{ère} éd. 1882), p. 69.

³ 19世紀の「ロマン＝フィユトン」については、L. Queffélec, *Le roman-feuilleton français au XIX^e siècle*, PUF, coll. « que sais-je », 1989を参照のこと。

⁴ 『死せる女の願い』に関する研究としては、John C. Lapp, *Les Racines du naturalisme : Zola avant les Rougon-Macquart* (traduit de l'américain par Danielle Lapp), Bordas, pp. 65-82 ; Colette Becker, *Les Apprentissages de Zola : du poète romantique au romancier naturaliste*, PUF, 1993, pp. 282-290 などがある。

なく、後のゾラの小説群において展開されることになる、もろもろの重要なテーマを内包しており、この作家の小説世界を語るうえで、決して看過できない作品である。本稿では、初期ゾラの異色作『死せる女の願い』から、いくつかの主題系を抽出することによって、『ルーゴン＝マッカーール叢書』の作者の小説的想像力の源泉を探っていきたい。

理想主義小説

前述したように、『死せる女の願い』は未完であり、第1部しか書かれていない。ゾラが第2部以降をどのように構想していたのかは不明だが、この第1部だけでひとつの完結した物語となっている。主人公ダニエル・ランボーは、ブランシュ・ド・リヨヌという貴婦人に庇護されて育った孤児である。ブランシュは死の床で、ダニエルに、幼い娘のジャンヌの成長を守護天使として見守るという使命を託す。ブランシュの死後、ジャンヌは修道院に入れられ、ダニエルは一文なしになって路頭に迷うが、偶然出会ったジョルジュ・レモンと親友になり、彼の助けで仕事を見つける。12年後、修道院を出たジャンヌは裕福なおばのテリエ夫人の家に引き取られる。ダニエルは秘書としてテリエ家に入り、ジャンヌの幸福のために盲目的に献身する。しかし、彼女が、金持ちで計算高いロランと結婚した時、嫉妬に苦しんだダニエルは、ジャンヌに対する自らの恋愛感情に気づく。ロランの急死後、ジャンヌはダニエルの親友ジョルジュと相思相愛の仲になる。ダニエルは、彼女の幸福のために自らの思いを犠牲にして2人を結婚させ、この世を去る。

『死せる女の願い』は、ジャンヌの守護天使となったダニエルの自己犠牲を主題とした教訓的な物語である。そして、「みなしご」や「犠牲的行為」のテーマに見られるように、メロドラマ的な色彩が強いこの作品は、同時代に流行していたオクターヴ・フィエらの体制順応的なブルジョワ向けの「理想主義小説」にかなり類似している⁵。上流社会を舞台にして展開されるロマネスクな物語と、感傷的な恋愛心理分析を特徴とするこのジャンルの小説は、現在ではほとんど読まれないが、第二帝政期には、制度的に公認された正統的

⁵ フィエの小説は、月2回発行の雑誌『両世界評論』(*Revue des Deux Mondes*)に発表されており、「ロマン＝フィエトン」ではない。しかし、特に第二帝政期以降は、新聞と雑誌の両方に書く作家が増えたこともあって、雑誌連載の小説と「ロマン＝フィエトン」は似たような特徴を有するようになる。この点に関しては、L. Queffelec, *op. cit.*, pp. 40 et 55 を参照のこと。

な小説であった⁶。

周知のように、第二帝政期の小説は、検閲の絶えざる脅威にさらされていた。そしてフィエのような順応主義的な作家は、「公序良俗」に反する危険性のないロマネスクな世界や心理描写に逃避したのである。ジャンフルーリの「写実主義」やゾラの「自然主義」などの第二帝政期の「前衛的」な小説に敵対したのは、何よりもこの「理想主義小説」であった。『死せる女の願い』の発表当時、ゾラは、テーヌらの実証主義の影響下で、「理想主義小説」のアンチテーゼといえる「科学的」客観性に依拠した自然主義文学の理論をすでに確立しつつあった。実際、同じ年に『レヴェヌマン』紙に発表していた一連の書評においては、ゾラは、美德を説く教訓的な小説に否定的な立場を表明している⁷。

しかし『死せる女の願い』は、「ロマン＝フィユトン」というジャンルの要請に従った結果、「理想主義小説」と同様に、ブルジョワ道徳に抵触することのない、ロマネスクな物語の紋切型に満ちた作品となっている。例えば、フィエの代表作『ある貧しい青年の物語』(*Le Roman d'un jeune homme pauvre*, 1858)は、父親の破産によって貧窮に陥った主人公が、プルターニュ地方の貴族の館に財産管理人として働き、紆余曲折の末に、その貴族の娘と結婚して財産と幸福を手に入れるというストーリーである。この小説と『死せる女の願い』には次のような共通点を見出すことができる。不幸な境遇にある青年が上流階級の家風に雇われ、貴族の娘に恋愛感情を抱くという設定、恋敵の登場による嫉妬の苦しみ、騎士道精神をもち恋人に献身的な主人公、善悪二元論的な構図などである。

そして、「理想主義小説」がそうであるように、『死せる女の願い』においても、外的世界の写実主義的な描写よりも、登場人物の性格や心理などの内

⁶ この流派の代表的作家であるジュール・サンドーは、1858年に小説家としては初めてアカデミー・フランセーズの会員となり、フィエも1862年にアカデミーに入った。

⁷ 例えば、ゾラは、1866年3月20日の『レヴェヌマン』に掲載された書評において、ルイ・ユルバックの小説『参事会員の庭』(*Le Jardin du chanoine*)を、以下のように評している。「ルイ・ユルバック氏は、誠実な精神を持ち、少しお説教好きではあるものの、確固とした信念をもっている。彼は芸術を道徳に結びつけようとしている。この素晴らしい意図に対して、ここでは拍手を送ることしかできない。しかし、私は正反對の考えを持っている。芸術は、火のようにすべてを浄化するのである」(Zola, *Œuvres complètes*, t. X, Cercle du livre précieux, 1968, p. 404)。ゾラの「理想主義小説」に対する批判的立場については、以下の拙論「Zola et le roman idéaliste à la Sand」、『仏語仏文学研究』、東京大学仏語仏文学研究会、第26号、2002年、pp. 253-267を参照のこと。

面描写のほうに重点がおかれている。確かに、端役のキャラクターは多かれ少なかれ類型的であるが、主人公であるジャンヌとダニエルの性格分析や内面描写においては、ゾラ独自の主題系や想像力を透かし見ることが可能なように思われる。以下では、この二人の主要登場人物の心理ドラマを分析してみたい。

ジャンヌ

ジャンヌは、6才で修道院に入り、18才まで社会から隔離されたこの特殊な環境で育った結果、「優雅さや感傷癖へと方向づけられた人形のような神経質な少女」(62)になる。彼女は幼くして母親と死別し、修道院で孤独に育ったため、冷淡で意地悪な女性になるが、心の奥底には、生来の情愛深い性格が眠っている。「彼女の内部には、ふたつのはっきりと異なった人格が存在した。それは、冷たく嘲笑的な少女(中略)と、善良で美しい魂である」(62)。この「善良で美しい魂」は、母親の助けが少しでもあれば目覚めるのだが、その母親が不在である。そして、修道院を出た後、「人形のような」ジャンヌは、テリエ夫人に導かれるままに、華やかな社交界生活に身を投じ、空虚で墮落した日々を過ごす。

しかし、ダニエルがテリエ家の秘書となり、ジャンヌを社交界の悪徳から守るために献身するようになると、彼女の内面に変化が起きる。「彼は、彼女の内部に、いわく言い難い感情をかきたてた。この不幸な少女の奥底に眠っていた情愛が密かに動き出した」(74)。ダニエルの存在は、ジャンヌの死んだ母親のいわば代役として、彼女の優しい心と呼び覚ましたのである。そして、ジャンヌは、ロランと不幸な結婚をした後、卑劣な夫に対する嫌悪感とともに、本当の愛情を求めるようになる。

ジャンヌの内部に情愛が眠っている限りにおいて、そして、その情愛が彼女を泣かせることがない限りにおいて、彼女は高慢でコケティッシュな人形のままでとどまっていた。(中略)しかし、今や、彼女の心(son cœur)が声高に話した。その心は、愛したいと願った。(中略)彼女のなかで母親が訴えかけた。彼女の内部の人格が支配的になり、周囲の状況のみが作り上げた外部の人格を追い払った。ヴェールが破られた(93)。

こうして、情愛に目覚めたジャンヌは、最後には愛する男性と結ばれることになる。

このように、ジャンヌの心理ドラマは、母親の存在と結びついた生来の人格と、修道院の教育や虚栄的な社交界生活で後天的に形成された人格の対立にある。そして、この図式は、『ルーゴン＝マッカール叢書』(*Les Rougon-Macquart, histoire naturelle et sociale d'une famille sous le second Empire, 1871-1893*)の第2巻『獲物の分け前』(*La Curée, 1872*)のヒロイン、ルネ・サッカールにおいて再び現れる⁸。

ルネは、ジャンヌと同様に幼くして母親を亡くし、9才から19才まで、修道院で「風変わりな教育を受け、悪徳を学んだ⁹」後、頹廢した第二帝政期の社交界において、贅沢と快樂に溺れる放蕩生活を送るようになる。しかし、ルネの内奥には、「由緒ある廉潔なブルジョワの本能¹⁰」が眠っている。なぜなら、ルネの父親は貴族の末裔であり、彼女は「家庭の美德が栄える平穩で慎重な人種¹¹」に属しているからである。しかし、ジャンヌと異なって、ルネは社交界の悪影響から脱却することができず、放蕩を重ねて破産し、最後は絶望のなかで死んでいく。

あえて図式化すると、ジャンヌとルネは、両者とも先天的な「良い」性格と、後天的に形成された「悪い」性格の二面性を持っている。しかし、ジャンヌの場合、内面の「善良で美しい魂」が完全に目覚め、彼女の人格を支配するようになるのに対して、ルネの心の奥に眠る貞潔な本能は、彼女が退屈したときに目覚め、彼女に後悔と絶望をもたらすという否定的な働きをするのみである。また、ルネの周りには、ダニエルのように美德へと導いてくれる存在がいない。逆に、ルネと関係のある男性は、夫のサッカールにせよ、義理の息子のマキシムにせよ、彼女を墮落させ、破滅に追い込んでいく。

この二人のヒロインの運命の違いは、「理想主義小説」と「自然主義小説」の世界観の違い、つまりオプチミズムとペシミズムをよく示している。しかし、いずれにせよ、両者とも、遺伝と環境という二つのファクターが形成した人格の二重性によって内面の葛藤が生まれる。そして、主人公ダニエルの心理ドラマにおいては、この二つの決定論的な要因による二項対立が、彼女

⁸ コレット・ベッケルが指摘するように、『死せる女の願い』は、『獲物の分け前』の粗描のような作品であり、ジャンヌがルネの原型になっているばかりではなく、この小説の中心となるいくつかのテーマ、例えば、金銭が支配する第二帝政期のモラルの墮落などが扱われている。Colette Becker, *op. cit.*, pp. 288-289 を参照のこと。

⁹ Zola, *La Curée*, in *Les Rougon-Macquart*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », t. I, 1960, p. 421.

¹⁰ *Ibid.*, p. 334.

¹¹ *Ibid.*, p. 421.

たちとは逆のかたちで、つまり「遺伝＝善、環境＝悪」ではなく「遺伝＝悪、環境＝善」という図式で展開されている。

ダニエル

ダニエルは、優しく不器用な青年であり、ジャンヌの母親ブランシュから与えられた使命に従って、愛するジャンヌのために身も心も尽してきた。しかし、その犠牲的行為は報われず、彼は、ジャンヌが愛しているのは、自分の親友のジョルジュであることを知る。そして、この残酷な成行きに対して怒りが沸きおこる。

そして、彼は通りに出て、家に帰った。その時、獣性が彼の心の奥底で目覚めた。絶望と狂気の恐ろしい発作に襲われた。

ついにダニエルは反撥した。肉体は叫び、心は犠牲を拒否した。このまま消え去ることはできない。これまで、つねに身を隠し、日陰で生きてきた。そして、自分に沈黙を強いて、自らの存在を折り曲げてきたのだ。自分に対して最高の報いがあるべきなのだ (102)。

このダニエルの発作は、内面に眠っていた感情の表出という意味で、前述のジャンヌの情愛の目覚めと類似している。彼の内部で、これまでブランシュから与えられた使命のもとで抑圧されていた「情念」が沸き起こる。「ダニエルは自分の守護天使の役割にうんざりした。いつも兄であって決して情人にはなれないのだ。この考えが頭の中で太鼓のように鳴り響いた」(103)。

しかし、主人公の奥底から現れたのは、ジャンヌの場合のように「善良で美しい魂」ではなく、「獣性 (la bête humaine)」という表現や、以下の引用文が示すように、理性では制御できない盲目的な衝動である。「彼の体の内部には、出口を探して飛び跳ね、誰に飛びかかったらいいのかわからずに、怒りにまかせてその場でくるくると回っている、たけり狂った獣 (une bête furieuse) がいた」(103)。ダーウィンの進化論に由来する人間の無意識に潜む「獣性」のイメージは、19世紀後半のフランス思想や文学に広く浸透していたが、周知のように、ゾラの小説に頻出する重要なテーマのひとつでもある¹²。

¹² ゾラの作品における « la bête humaine » のイメージとその精神分析的解釈については、Jean Borie, *Zola et les mythes ou de la nausée au salut*, librairie générale française, coll. « Le Livre de Poche », 2003 [1^{er} éd. 1971], pp. 57-170 を参照のこと。

そして、この主題は『ルーゴン＝マッカール叢書』の第17巻『獣人』(*La Bête humaine*, 1890)において最も深められることになるが、『獣人』の主人公ジャック・ランチエが、本能的な衝動に突き動かされるままに殺人を犯すのに対して、ダニエルの内部の「たけり狂った獣」は、羞恥心とともに沈静化していく。

その時、彼は大きな羞恥心に襲われた。呆然として倒れこみ、もっと優しい涙を流した。肉体は沈黙し、彼は、ゆっくりとして物悲しい自分の心臓の鼓動を耳にした。血と神経の発作が消え去るのを待ちながら、心臓は小声でうめいた(103)。

注目すべきは、「獣性」の目覚めが、「血と神経の発作 (*la crise du sang et des nerfs*)」と表現されていることである。ダニエルにおいて、そしてゾラの登場人物全般において、無意識的な衝動は、血と神経からなる「肉体」の働き、あるいは「肉体」そのものなのである。例えば、『獣人』のなかでは、ジャックの殺人に関して、「血と神経の推進力によってのみ、人間は殺人を犯す¹³」と説明されている。ゾラにおける「無意識」の概念は、この意味でオリジナルなものであり、精神分析的な「無意識」とは一線を画しているといえる¹⁴。そして、発作が静まるとともに、ダニエルの内面で神秘的な変化が起きる。

誰もこの人間の内部で起きたことを分析できないであろう。ダニエルは人性から離れ、無限かつ絶対的な愛の領域のなかに再び上昇した。彼は、その高みで、あらゆる善良さ、あらゆる献身、あらゆる自己犠牲を再び見出した。少しずつ、大きな心地良さが彼を満たした。肉体がより軽くなり、魂が自分に対して解放してくれたことを感謝しているように思えた。彼は、あまり考えることなく、その変化に身をゆだねていた。なぜなら、神 (*le ciel*) が自分のなかに入り、聖なる仕事を成し遂げることが分かったからである。

そして、その仕事が成し遂げられた時、ダニエルは悲しげに微笑んだ。彼は再び、この世のあらゆる激しい情熱と縁を切った。肉体は克服され、魂はまもなく消え去るであろうことを理解した。

¹³ Zola, *La Bête humaine*, in *Les Rougon-Macquart*, éd. cit., t. IV, 1966, p. 1155.

¹⁴ この点に関して、ジャック・ノワレは次のように指摘している。「ゾラにとって、無意識とは、それと密接な関係がある遺伝と同様に、純粹に実体的なもの (*substantiel*) である。あらゆる心理的発達の前に、無意識は決定的に肉体のなかに刻み込まれている」(Jacques Noiray, « L'angoisse de la chair dans *La Bête humaine* », *Voix de l'écrivain, Mélanges offerts à Guy Sagnes*, Toulouse, Presses universitaires du Mirail, 1996, p. 171)。

今や、彼は崇高なやすらぎを感じていた。彼の聖なる女性（筆者註：ブランシュ）への思いが再び戻ってきた。そして、彼女の最後の願いをかなえようという心構えができた。献身的行為は、より清澄でより気高い愛のもうひとつのかたちのように思えた。彼の深く澄んだ目は、物事をはっきりと見ていた。彼の心は、決着をつけるように、つまり自己犠牲を完成させるようにと彼を駆り立てた。

（中略）傷ついた肉体のなかで、訴えかけてくるものはもうなかった。彼はすべて魂になっていた（104）。

このように、ダニエルは、「神」の助けによって、人間的な「肉体」の欲望から解放され、ジャンヌのためならどのような自己犠牲も受け入れるという「無限かつ絶対的な愛の領域」に到達する。仏教的に言うと、主人公は煩惱から解脱し、涅槃に至ったのである。あるいは、精神分析の見地からすると、ダニエルの内面で起きた変化は、性的本能から崇高な犠牲的精神への「昇華」であるともいえるだろう。

情念と義務の戦い

ゾラは、小説家としてデビューする前の1864年に書いたガストン・ラヴァレーの『オーレリアン』(Aurélien)という小説に関する書評のなかで、次のように述べている。

人間の魂のなかでしばしば起きる恐ろしい戦いのひとつに、情熱と義務の崇高な戦いがある。とりわけ人間固有の崇高なドラマを糧としてきた文学作品は、どの時代も、この悲劇的感情の大きな源である、欲望の高まりと戦う熟考した末の意志という題材から着想を得てきた。

とりわけ、17世紀は、この感情と受け入れるべき掟の衝突の偉大さを理解していたように思われる。一例を挙げるなら、『ル・シッド』は義務に対する厳しい信仰によって征服された情念のモデルとして後世に残るであろう¹⁵。

ダニエルの心理ドラマは、このコルネイユ的な「情念と義務の戦い」から成り立っている。つまり、彼の「肉体」と結びついた獣性が生み出す「情念」と、「魂」が成就しようとする使命、つまりジャンヌに献身するという「義務」が対立し、最後には、「魂＝義務」が「肉体＝情念」を克服するのである。こ

¹⁵ Zola, *Œuvres complètes*, éd. cit., t. X, p. 314.

のような、性的本能の盲目的な衝動と宗教的あるいは社会的なモラルの対立、つまり、遺伝的な要素と環境によって形成された要素の対立は、ゾラが好む「生と死」、「光と闇」などコントラストの美学と通じるものであり、彼の多くの登場人物の心理ドラマに見出すことができる。

このいわば自然主義版「情念と義務の戦い」の典型的な例は、『ルーゴン＝マッカール叢書』のなかで最もロマネスクな小説である第16巻『夢』(*Le Rêve*, 1888)のヒロイン、アンジェリックの場合である¹⁶。ダニエルと同じく「みなしご」の彼女は、ルーゴン家の遺伝から時に狂暴で激情的な子供だったが、9才の時に聖堂の傍に住む信心深いユベール夫妻に引きとられてからは、おだやかで清純な娘に育っていく。やがて彼女の前に美青年フェリシアンが登場し、二人は愛し合うが、やがて彼は司教の息子であり、身分違いのために結婚は不可能であることがわかる。その時、アンジェリックの内部で、遺伝的な激しい情熱の炎と、宗教的な環境で育まれた服従の美德が衝突する。

彼女が社会的禁忌を破ってフェリシアンに会いに行こうと思うたびに、この「情念と義務の戦い」が繰り返される。

彼女は、しばしば、激情に打ち勝ったように思った。彼女のうちに大きな静寂が生まれた。まるで他人を見ているかのように、自分自身が、自己放棄の謙譲のなかで、まったく静かに、従順な娘のように跪いている姿が見えるような気がした。それはもう彼女ではなく、彼女がそうなったところの、環境と教育が作り上げたところの賢明な少女だった。しかし、そのあと、血の潮が湧き上がり、彼女をぼんやりとさせた。その美しい健康や燃えるような若さが、逃げ出した雌馬のように駆け回った。そして、彼女の驕りや情熱とともに、彼女の起源である荒々しい未知のものに身を任せるのだった¹⁷。

このアンジェリックの内面の「逃げ出した雌馬 (*cavales échappées*)」や「彼女の起源である荒々しい未知のもの (*l'inconnu violent de son origine*)」は、ダニエルの内部の「たけり狂った獣」や『獣人』の主人公を殺人へと駆り立てる発作と同じ本能的衝動だといえる。しかし、最後には、環境や教育の影響によって形成されたキリスト教的な「自己放棄の謙譲」がこの衝動を克服するに至る。つまり、ダニエルの場合と同様に、「義務」が「情念」に勝るのであ

¹⁶ ゾラは『夢』の準備草稿において、「情念と義務の永遠の戦い (*la lutte éternelle de la passion et du devoir*)」を作品のテーマのひとつにすると言明している (Bibliothèque Nationale de Paris, Nouvelles Acquisitions Françaises, Manuscrits 10323, n° 217)。

¹⁷ Zola, *Le Rêve*, in *Les Rougon-Macquart*, éd. cit., t. IV, 1966, p. 955.

る¹⁸。

先に見たように、ダニエルが「獣性」を克服できたのは「神」の説明不可能な働きによるものであったが、アンジェリックの本能的衝動も、最終的には、彼女の意志とは関係がない「恩寵 (la grâce)」と呼ばれるものの働き¹⁹によって抑制される。両者の場合とも、自らの意識の外にある超越的な力によって「情念」が克服されるという意味では、キリスト教的、神秘主義的なドラマである。しかし、ダニエルもアンジェリックも、その性的欲望、精神分析用語を使えば「リビドー」が消え去った後は、肉体的に衰弱するばかりであり、物語の最後で死んでしまう。彼らの死に至る過程は、キリスト教の人間観と対立するゾラ特有のヴィジョンを象徴的に表しているように思われる。つまり、「獣性」は生命の根源的なエネルギーであり、「リビドー」の消滅は、生命そのものの終焉なのである。

自己犠牲

ダニエルは内なる「獣性」を克服した後、愛するジャンヌを親友のジョルジュに譲り、ふたりを結婚させる、という最後の自己犠牲を実行する。このような犠牲的行為は極めてメロドラマ的な主題といえるが、ジャック・ノワレが指摘しているように、「犠牲」(sacrifice)は、ゾラの全時期の作品にオブセッションのように現れるテーマでもあり、この作家のほとんどの小説に、自ら進んで、あるいは、周囲の状況によってやむを得ず、何らかの犠牲となる人物が登場している²⁰。

ゾラの登場人物の「犠牲」にはいくつかの形態があり、例えば、前述した『獲物の分け前』のルネは、頹廃した第二帝政期の社交界の悪環境の犠牲と

¹⁸ 「情念と義務の戦い」はアンジェリックだけではなく、ユベール夫妻やフェリシアンの子であるオートクール司教においても見出され、それぞれの「戦い」の間には密接な影響関係がある。『夢』の登場人物の心理的葛藤についての精神的な解釈については、Adolfo Fernandez-Zoila, « Le jeu des imaginaires dans *Le Rêve* », *Les Cahiers naturalistes*, n° 62, 2002, pp. 153-170 を参照のこと。

¹⁹ アンジェリックにおける「恩寵」とは、神秘的な環境や宗教的教育の効果のことであり、本来のキリスト教的な意味での「恩寵」ではなく、極めて「自然主義的な」事象である。この点に関しては、Sophie Guermès, « La “philosophie cachée” du *Rêve* », *Les Cahiers naturalistes*, n° 76, 2002, pp. 49-65 を参照のこと。

²⁰ Jacques Noiray, « De *La Confession de Claude* à *J'accuse* : formes et significations du sacrifice dans l'œuvre d'Émile Zola », *Lire/Dé-lire ZOLA*, Nouveau Monde, 2004, pp. 275-293.

なり身を滅ぼしていく。そして、ダニエルの自己犠牲は、『ルーゴン＝マッカーール叢書』の第12巻『生きるよろこび』(*La Joie de vivre*, 1884)のポーリーヌ・クニユヤ、『三都市』(*Les Trois Villes*, 1894-1898)の第3巻『パリ』(*Paris*, 1898)のギヨーム・フロマンの自己犠牲のかたちと同じである。つまり、自己の「情念」を犠牲にして、愛する人を第三者に与えるという、他人を幸福のために果たすべき「義務」を果たすのである²¹。

特に『生きるよろこび』のポーリーヌの心理ドラマは、ダニエルのそれと非常によく似た特徴を有している。ポーリーヌは、自分の財産などあらゆるものを他人のために放棄していくが、最大の犠牲的行為は、愛するラザールを恋敵のルイズと結婚させることである。ジャンヌのために献身した挙句、彼女を親友に譲ることになるダニエルと同様に、ポーリーヌもさまざまな形でラザールに尽くすが、彼はルイズに接近する。そして、ポーリーヌが、彼を幸せにするためには二人を結婚させるべきだと判断したその夜、嫉妬とともに彼女の「肉体」が反抗し、その内面で激しい葛藤が起きる。

嫉妬の狂暴な怒りが彼女の前におぞましい性的なイメージを喚起し、その怒りに揺さぶられ、彼女は長い間もだえ苦しんだ。つねに、まず、血が彼女を激しく駆り立てた。それは、月日や思慮分別によっては静めることができない荒々しさだった。そして、彼女はひどい消耗状態に陥り、その肉体は疲労困憊していた²²。

怒りが沈静化したのち、ポーリーヌは理性的に考えた末に、やはりラザールとルイズの結婚が妥当だという結論に達する。そして、夜明けには、深い安らぎとともに、彼女は、『死せる女の願い』の主人公の到達した「無限かつ絶対的な愛の領域」と似たような境地に至る。

かつて、これほど軽やかで、高尚で、超然とした気持ちになったことがなかった。すべてが終わった。彼女はエゴイズムの束縛を断ち切った。もう何にも誰にも期待しない。そして、彼女の奥底には、犠牲的行為の微妙な快樂があった。(中略)それは、他者への愛の最高の段階だった。つまり、自らの存在を消すこと、十分に与えたと思うことなしに、すべてのものを与えること、自分が作り出さず共有もしない至福を喜ぶほどに愛することである²³。

²¹ この点に関しては、*Ibid.*, pp. 279-281 を参照のこと。

²² Zola, *La Joie de vivre*, in *Les Rougon-Macquart*, éd. cit., t. III, 1964, p. 1030.

²³ *Ibid.*, p. 1031.

こうして、ダニエルと同じような経過をたどって「他者への愛の最高の段階」に達したポーリーヌは、ラザールとルイズを説得して結婚させ、自己犠牲を成就する。しかし『生きるよるこび』のヒロインにおいては、ダニエルやアンジェリックとは異なり、神秘的な働きによって「肉体」つまり「獣性」が消滅することはなく、物語の最後で死ぬわけでもない。ポーリーヌは内的葛藤をもたらす「リビドー」とともに生き続ける。そしてラザールとルイズの結婚式当日の夜が、その葛藤のクライマックスとなる。

マゾヒズム

その夜、嫉妬に苦しむポーリーヌは、自分の生理出血を見て、その虚しさに絶望し、発作的に自らの肉体をハサミで切り刻みたいという衝動にかられる²⁴。これは、ジャン・ボリが指摘するように、『獣人』の主人公を駆り立てる殺人欲求と同じ「リビドー」と結びついた衝動といえるが²⁵、彼女の場合は、対象が他者ではなく自分自身である。この自己破壊的な、いわばマゾヒスト的な衝動は、先の引用文中に言及されていた彼女の奥底にある「犠牲的行為の微妙な快楽 (*la volupté subtile du sacrifice*)」と連動しているように思われる。つまり、殉教者において苦痛と快楽が共存するといわれるように、ポーリーヌの自己犠牲は広い意味でのマゾヒズムと結びついている。精神分析的な見方からすると、彼女は、この倒錯的な快楽によって、満たされることのない性的欲望の埋め合わせをしているともいえる。同じように、『死せる女の願い』の主人公の犠牲的行為も、マゾヒズムと関連付けて解釈することも可能である。

ダニエルは、ジャンヌの母親から与えられた使命のために身命をなげすめる、まさに殉教者であり、先に見たように、愛するジャンヌを親友のジョルジュと結婚させる最後の自己犠牲によって、苦悶すると同時に「崇高なやすらぎ」という神秘的な幸福感を味わうのである。そして、彼には自虐的な傾向がある。例えば、ジャンヌがロランと結婚する時に、ダニエルは、嫉妬にさいなまれながらも、「抗しがたい欲望 (*un désir irrésistible*)」(88)に突き動かされ、わざわざ結婚式の日を調べ、自らの苦しみを増加させる。さらに式

²⁴ Zola, *La Joie de vivre*, éd. cit., p. 1044.

²⁵ Jean Borie, *Le Tyran timide, le naturalisme de la femme au XIX^e siècle*, Klincksieck, 1973, pp. 129-130 を参照のこと。

の当日には、何かに駆り立てられるように会場である教会に赴き、その柱の陰で「彼は苦悶のあらゆる恐ろしさを経験する」(88)。このエピソードでは、ダニエルの無意識のマゾヒズムが描かれているように思われる。

ゾラの小説において、ダニエルのように、愛する人を第三者に奪われ、嫉妬に苦しむ登場人物は数多いが²⁶、その嫉妬の苦しみは、しばしば自虐的な快樂へと変容していく。例えば、処女長編『クロードの告白』(*La Confession de Claude*, 1865)の語り手であり主人公は、自分の愛人の裏切りを知ったのち、絶望とともに、マゾヒズムそのものといえるような恍惚感を抱く。

彼女は私を引き裂くのだが、私は彼女を愛している。彼女が私の肉体に差し込むすべての針の切っ先ゆえに彼女を愛するのだ。私は、自分自身に鞭を加えて死んでいったというあの修道僧たちの苦痛に満ちた恍惚(l'extase douloureuse)を感じる²⁷。

周知のように、『クロードの告白』は、ゾラの青年期の苦い体験を描いた自伝的作品であり、クロードは若きゾラの分身といえる。従って、この小説の主人公がそうであるように、作家自身にもマゾヒスト的傾向があることが推察できる。そして、このような性向は他の登場人物にも見出せる。

例えば『ルーゴン＝マッカーール叢書』の第9巻『ナナ』(*Nana*, 1880)のミュファ伯爵も、愛する女性に虐げられることに宗教的恍惚を感じる人物である。伯爵は、厳格な宗教教育を受けた禁欲的な男性だったが、40才にしてナナに感溺し、彼女に翻弄され、ついには、彼女の気まぐれによって、足蹴にされ、鞭で打たれるまでになる。その時、彼は「風に刺され、糞を食らう聖者のことをぼんやりと思い出しながら²⁸」、その屈辱に身を任せ、もっと墮落したいと願うのである。そして、ナナに捨てられた後、ミュファ伯爵は再び宗教の厳しい戒律に従うようになるが、それは、宗教の恍惚感が、ナナが与

²⁶ このような三角関係は、特に『ルーゴン＝マッカーール叢書』以前の初期小説群の中心的なテーマとなっている。『死せる女の願い』以外にも、『クロードの告白』、『テレーズ・ラカン』、『マドレーヌ・フェラ』(*Madeleine Féral*, 1868)において、心身とも脆弱で女性的な繊細さをもつ男性が、力強く精力旺盛な男性によって、妻あるいは恋人を横取りされるという構図が見出される。とりわけ『マドレーヌ・フェラ』に関して、この強い男性を、精神分析的に、母親から子供を引き離す父親のイメージとして解釈する研究がある。この点に関しては、John C. Lapp, *op. cit.*, p. 112 sq, Jean Borie, *Zola et les mythes ou de la nausée au salut*, éd. cit., p. 74 sq を参照のこと。

²⁷ Zola, *La Confession de Claude*, in *Œuvres complètes*, éd. cit., t. I, 1962, pp. 95-96.

²⁸ Zola, *Nana*, in *Les Rougon-Macquart*, éd. cit., t. II, 1961, p. 1460.

える官能的快樂に取って代わったに過ぎない。「教会の奥で冷たい敷石に跪くと、彼の存在の暗い欲望が満たされ、かつての官能の喜び、彼の筋肉の痙攣、甘美な知性の揺らぎを再び見出した²⁹」。伯爵にとって、ナナの性の全能は神のそれと同じであり、両者とも、彼を忘我の恍惚状態へ導くのである。

ジャック・ノワレは、ゾラの作品のなかで「犠牲」のテーマが多い理由として、キリストの受難神話の記憶、ユゴーなどのロマン主義文学やメロドラマ的な大衆文学の影響、あるいは、自然主義小説の「世俗化した」世界で、宗教的で崇高なドラマを生み出すことができるという、このテーマ自体の文学的効果を指摘している³⁰。しかし、ゾラの「犠牲」の主題への愛着は、とりわけ、作家自身のマゾヒスト的性向と強く結びついているのではないだろうか。つまり、「犠牲」を強いられる登場人物の苦しみは、ゾラの倒錯的欲望の無意識的な投影だと考えられるのである。

おわりに

19世紀の「ロマン＝フイユトン」は、商業的な必要性から、非常な速さで執筆されたために、多くの場合、文体が粗雑で、紋切型が多用され、偶然を利用した安易なストーリーになっているが、他方では、その書くスピードの速さゆえに、シュールリアリストが「自動記述法」(écriture automatique)によって目指したように、作者の無意識的な幻想やイメージが自ずから表出するという傾向もある³¹。このような特徴は、『死せる女の願い』にも見出せるように思われる。この作品では、大衆小説の紋切型を多用する一方で、作家のロマネスクな想像力が、特定の文学理論にとらわれない、無造作にあるいは無意識的に展開されている。その結果、ゾラの想像力の深い部分と結びついた主題系が、技巧的に洗練されない状態で、いわば、加工されない原石のまま提示されている。実際、『死せる女の願い』は、「情念と義務の戦い」や「自己犠牲」のテーマ以外にも、生命の活力を再生させる母なる自然³²、登

²⁹ *Ibid.*, p. 1465.

³⁰ Jacques Noiray, « De *La Confession de Claude* à *J'accuse* : formes et significations du sacrifice dans l'œuvre d'Émile Zola », art. cit., p. 283.

³¹ この点に関しては、L. Queffelec, *op. cit.*, p. 40 を参照のこと。

³² ジャンヌは、『ナナ』のヒロインがそうであるように、田舎の美しい別荘地で都会の社交界生活で失われた若さと活力を取り戻す。この点に関しては Colette Becker, *op. cit.*, p. 290 を参照のこと。また、『生きるよろこび』のポーリーヌが、ノルマンディの海に身を任せ、「大きな潮流を肉体に感じて、心臓の鼓動を整えてくれる激しい運動の喜び

場人物の行動を支配する固定観念の存在³³などの、ゾラのその後の作品の基調となるもろもろの要素を内包している。

これまで見てきたように、『死せる女の願い』では、大衆小説的な「犠牲的行為」というテーマが、性的本能の「昇華」やマゾヒスト的欲望といったゾラ特有の主題系と結びついているが、彼の小説の魅力のひとつは、このような、ある種の通俗性と作家独自の想像力の融合にあるように思われる。例えば、『ルーゴン＝マッカーール叢書』の第11巻『ボヌール・デ・ダム百貨店』(*Au Bonheur des Dames*, 1883)においては、ヒロインの極めてメロドラマ的なサクセス・ストーリーが、オリジナリティ溢れるデパートの叙事詩的、象徴的描写を背景に展開される。また、『ブヴァールとペキュシュ』(*Bouvard et Pécuchet*)のような筋らしい筋のない小説を書くに至ったフローベールとは対照的に、ゾラは、一貫して、読者を惹きつけるストーリーと劇的なクライマックスを備えた「伝統的」小説を書き続け、特に後期の小説は、善悪二元論的な構成やセンチメンタリズムなどの通俗小説的な色合いを強めていく。この傾向は、彼のほとんどの小説が、単行本になる前に日刊の大衆紙に連載されていることと密接に関連しているように思われるが³⁴、いずれにせよ、ゾラと同時代の「ロマン＝フィユトン」などの大衆小説との関係は無視できないものであり、今後さらに研究すべき課題であろう。

を味わう」(Zola, *La Joie de vivre*, éd. cit., p. 871) のと同様に、ダニエルは、「愛する地中海の寄せては返す波のなかで、無限の休息」(89)を味わうことで精神的に癒される。

³³ ダニエルにとって、死んだ恩人のブランシュから与えられた使命は、ある意味では「固定観念」であって、彼は内面から聞こえてくるブランシュの「声(voix)」(65, 89)に従って行動する。

³⁴ 例外としては、最初から単行本で出版された『クロードの告白』、サンクトペテルブルグの月刊誌『ヨーロッパ通信』(*Le Messager de l'Europe*)に連載された『ムーレ神父のあやまち』(*La Faute de l'abbé Mouret*, 1875)、月2回発行の絵入り雑誌『ルヴュ・イリュストレ』(*La Revue illustrée*)に発表された『夢』がある。